

様式1 令和2年度 山梨県立甲府昭和高等学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針

山梨県立甲府昭和高等学校校長 萩原 章司

本年度の重点目標	1 甲府昭和高校Can-doリストを活用し、生徒の学びに向かう力、資質・能力の育成を図る。
	2 さわやか教育を実践し、自ら考え行動できる生徒の育成を図る。
	3 安全で安心して学べる教育環境をつくり、地域・関係機関と連携した取り組みの充実を図る。

達成度	A ほぼ達成できた。(8割以上)
	B 概ね達成できた。(6割以上)
	C 不十分である。(4割以上)
	D 達成できなかった。(4割以下)

評価	4 良くできている。
	3 できている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

自己評価						
番号	評価項目	本年度の重点目標	年度末評価(2月26日現在)			
			具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度
1	思考力・判断力・表現力の育成	育成すべき資質・能力を明確にした授業実践	相互授業参観実施状況、生徒授業アンケート、教職員・生徒アンケート	・定期試験の作問等による思考力・表現力の育成に関しては、教職員・生徒ともに8割以上から高評価が得られた。 ・多様な観点による評価が学ぶ意欲の向上につながっているかについては、7割以上から高評価が得られている。	A	・思考力・判断力・表現力の育成に向けては、「指導と評価の一体化」の観点から、定期試験での作問等の工夫に留まらず、授業を通じての更なる取り組みが求められる。
2	授業改善の実践	相互授業参観等を通して授業改善	授業参観への参加実践・報告	・休校期間後の授業進捗の回復のため、相互授業参観に向けた取り組みは昨年度を下回った。	B	・ICT機器の利点を生かした授業実践に向けて、授業改善を進める必要がある。
3	学習の適切な評価と指導の工夫	指導と評価の一体化を目指した評価指標、規準、基準の設定と実践	生徒授業アンケート	・9割近い生徒から、「評価は納得できる」という回答が得られている。 ・ICTを活用した授業や指導を行った、と回答した教職員が8割近い一方で、授業のみならず部活動も含めた生徒側からの評価では、高評価は4割程度であった。	B	・「知識・理解」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点を踏まえた評価方法の構築とパフォーマンス評価の具体的な方法について各教科・科目での創意工夫が求められる。
4	生活リズムの確立を図る自主的な行動の実践	登校時指導週間の活用、面談による指導	教職員・生徒・保護者アンケート 遅刻者数	・休校期間明けは昨年比で遅刻者の増加が見られたが、生徒アンケートからは基本的な生活習慣の重要性への認識は窺える。	B	・5分前遅刻者対策を含め、生活習慣の確立に向けた、更なる意識の啓発が必要である。
5	マナーアップ実践	自転車・バイクでの登下校時の安全指導	事故・違反件数	・登校日数が減った中、昨年比で見ても事故・違反件数ともに増加した。注意喚起や啓発活動も十分にできなかった。	B	・自転車・バイクでの登下校時の安全確保や交通法規の遵守に向けた指導を強化する必要がある。
6	防災計画・危機管理マニュアルの見直し	「水防法」、「土砂災害防止法」を踏まえた学校安全計画の見直し	教職員・生徒・保護者アンケート	・個々の生徒が自分の通学路における災害危険箇所を調べたことで、危機意識が高まったことが窺える。	A	・昭和町と連携して作成した「学校避難確保計画」を防災訓練等でも活用が求められる。
7	心身の健康の保持	ホームルームでの指導、体育を中心とした健康の保持増進に係る指導の充実	欠席者数、皆勤者数、教職員・生徒・保護者アンケート	・休校期間に生活習慣が大きく乱れた生徒もなく、出席状況については昨年と大きく変化はなかった。	A	・健康観察を含め、今後も生徒の長期欠席の兆候を見逃さず、長欠者を出さない指導を目指す。
8	関係機関及び昭和町との連携事業の推進	連携事業の推進と改善	小中高合同会議での事業への反省、教職員・生徒アンケート	・コロナ禍の影響で生徒が関係する連携事業は実現できなかったが、中学校での訪問授業は実現できた。	B	・その時点での感染状況を確認しながら、感染防止対策を徹底したうえで、交流の可否を検討する。

学校関係者評価	
実施日 (令和3年3月12日)	
評価	意見・要望等
4	・学校全体の教育力・組織力で、個々の生徒に応じた資質・能力を培うという、内面からの向上を目標とした適切な方針である。生徒の活用状況について教職員と生徒との間に評価の差があることから、更なる工夫により改善して欲しい。
3	・ICTによる教育支援は、今後も引き続き必要と思われるため、具体的な達成目標を設定した方がよい。
3	・Classiの活用についての認識に差異が見られることより、活用の度合い等については分析することが必要である。 ・Can-doリストについては、授業を中心とした日常的な活用の機会を増やし、また指導と評価のプロセスの中につかりと位置付けることが必要となる。
3	・感染状況次第では、全校規模での集会の開催が困難になることも予想される。そのような状況でも、規範意識や自主性・主体性の醸成をいかに図っていくかについて検討する必要がある。
3	・交通事故時には、素早かつ確実な対応がとられており、生徒の身になって事後処理を考えている様子が窺える。
4	・通学区域が広範囲に及ぶことから、個々の生徒が自分自身の通学路に対して危機意識を持ち、また危機回避能力が向上するよう指導してほしい。
4	・休校期間が明けた後、生活習慣が大きく乱れた生徒や長期欠席者がほとんど出なかったのはよかった。
3	・今年度の困難な状況の中、山梨大学との高大連携講座が例年通り実施され、生徒からもよい感想が得られたことは素晴らしいと思う。

留意点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。
 (2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的な対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。